In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	欧陽予倩と広東戯劇研究所(下)
Author	松浦, 恆雄
Citation	人文研究. 48 巻 7 号, p.375-398.
Issue Date	1996
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部紀要
第四八巻　第七分冊　一九九六年十二月

欧陽予倩と広東戯劇研究所（下）

松浦恒雄

五、広東戯劇研究所の成立とその活動

まず、広東戯劇研究所の成立から閉鎖にいたる経緯とその主要な活動を、年表の形でまとめておく。(1)『広州民国日報』（以下『広』と略）を基礎資料としたが、一九三〇年以降が影印されていないため、それ以降の記述は、研究所の機関誌『戯劇』や当事者の回想録などに頼らざるを得ず、記述に精粗のむらができてしまった。十数回に及ぶ話劇、粤劇公演をはじめとする研究所の活動の全てを正確に把握することは難しく、今後の課題としておきたい。※印は、関連事項。

一九二八年

十一月二〇日　李済深主席、欧陽予倩広州入り。

十一月三〇日　省政府第一一三次会議において、李済深主席が戯劇研究所の設立について提起、決議を経て、教育庁の審査にまわす。

十二月　三日　欧陽予倩、広州民国日報記者の質問に答え、政府の援助の下、「内容は民衆を基準とし、形式は全ての世界演劇に共通な趨勢を基準」とした、「民衆的な、中国的なしかも世界性のある」演劇の創成を語る（「国劇運動与粤劇」）。

十二月　六日　李主席提案の「（一）本所之事業」部分が公表される。その内容は、以下の八項目：A整理国劇、B介紹欧州戯劇、C創制新戯劇、D組織模範劇場、E組織小劇場、F組織演員養成所、G組織劇場審査会、H刊行戯劇雑誌、I設立戯劇図書室。

十二月　八日　李主席提案の「（三）本所経費之概算」部分が公表される。開設費として十八万元、経常費として毎年五万四七二〇元。

十二月一四日　省政府第一一七次会議において、審査意見を可決、欧陽予倩に戯劇研究所所長を委任、政治会議広東分会の認可後、直ちに正式に委任。

十二月一五日　教育庁第二課長欧宗祐による審査書が公表される。李主席提案の「（二）本所之組織」が次のように改められる。所長、総務股（会計、庶務、文牘、交際）、劇務股（劇場佈置、導演、絃楽）、編纂股（雑誌編輯、劇本編輯、整理国劇、介紹西劇、創制新歌劇）、演員養成所、広東大劇場籌備委員会。事業項目Dは、広東大劇場籌備委員会が設けられ、今後の課題とされたため、開設費のうち、大劇場建設関係の十六万元は、削られる。

十二月二七日　省政府正式に欧陽予倩を広東戯劇研究所所長に任命、準備費として三千元を支給する。

広東全省工会聯合会にて欧陽予倩講演、芸術性を備えた平民戯劇の創成を説く。

一九二九年

一月三一日　広東戯劇研究所の設立場所が廻龍橋土地裁判所旧址に決まる。研究所の招聘した専門家、厳工上、唐槐秋、邵指帰、洪深、胡春冰、田漢等すでに到着。

二月三～五日　※欧陽予倩監督・編劇・出演の映画『天涯歌女』が、新国民で放映される。

二月十六日　広東戯劇研究所、南関増沙上街十一号において成立典礼を行う。式次第は以下の通り。（一）粛立、（二）奏楽、（三）向党旗国旗総理遺像行三鞠躬礼、（四）恭読総理遺嘱、（五）所長報告籌備情形並進行計劃、（六）党部代表訓詞、（七）省政府代表訓詞、（八）来賓演説、（九）所長答詞、（十）奏楽、（十一）撮影、（十二）茶会。

『広州民国日報』副刊『戯劇研究』創刊、第十二期（五月五日）で停刊。

二月二五日　広東戯劇研究所付設演劇学校学生募集開始、三月六、七日入学試験。定員は、正科生五十名（演劇四十、音楽十）、特別班五十名、男女不問。

この日までに研究所の住所が、南関廻龍上街十二号に移る。

三月　六日　演劇学校入学試験、受験生二百余名。試験は、国文、三民主義、社会常識の三科目。国文試題は、「一、我為什麼要入演劇学校、二、我対於戯劇革新的意見、三、我所愛読的劇本和他的内容」。

三月六～十一日　※南国社話劇部旅粵公演。

三月十一日　演劇学校合格発表。合格者は正科生三七名、特別班十二名。

三月二五日　演劇学校第二次入学試験。

三月二九日　演劇学校第二次入学試験合格発表。合格者は正科生十六名（男九、女七）、特別班五名（男三、女二）。正科生の中には、盧敦、李晨風等中山大学呼喚社のメンバーがいた。(カ)

四月　一日　演劇学校開学典礼。校長の洪深が上海に戻ったため、欧陽予倩が兼任。名誉校長は、田漢。(ク)

四月　八日　演劇学校授業開始。

四月十三日　聶耳、演劇学校にはいるが、研究所の粤劇改革に興味を持てず、まもなく昆明に戻る。(ケ)聶耳は、入学試験を受けていない。特に中途入学を許可されたのであろうか、詳細は不明。

四月二五日　広東戯劇研究所付設小劇場開幕にあたり会員五百名を募集。五月十一日にこけら落とし、十一、十二両日は創作劇（一）屏風後、（二）潘金蓮を上演、以後毎月二回の公演、会員制を採る予定。(コ)

五月一〇日　演劇学校の教学態勢の不備、経費不足による問題起こる。

五月十六日　粤桂戦争が起こり（五日）、財政庁長范其務の提起により、研究所の活動は停止、演劇学校も解散。(サ)一説には、なお活動を続けるという（『広』五月十六日）。

六月二一日　広東戯劇研究所の活動再開、所長は欧陽予倩。毎月の経費は四千余元から二千余元に削られ、改組に着手する。

六月二五日　『戯劇』一巻一期、広東戯劇研究所出版発行。二巻二期より神州国光社出版発行。二巻六期（三二年六月）まで、計十二期が刊行される。

七月十六日　演劇学校を回復せずに、研究班のみを設け数カ月で劇団員の養成をめざす。研究班の学生の

多くは市立師範学校、市美（市美術学校？）、中山大学の学生。また、音楽研究会を設け、毎週研究会、演奏会、遊芸会を開くという。話劇は、劇務主任唐槐秋が「生之意志」を舞台練習。歌劇の台本は、欧陽予倩所長が、粤劇の歌唱と北劇の仕草に手を加え、音楽は南北曲を集大成し、外国式の幕を用いて編纂中。

七月二〇日　粤劇改革に着手するため、全省の劇団、役者の数、場所、演じる台本の内容などを調査。研究所が適切な台本を編んで各劇団に提供する外、各劇団員も研究所で研修を受けられることを、八和劇員総工会を通じて通知。

八月二～四日　研究所小劇場において、第一回話劇公演（午後八～十一時）

黒龍江之鬼（党部委員黄季陸の委嘱により欧陽予倩編劇、粤語上演）

丈夫之本相

未完成之傑作

小英姑娘（欧陽予倩作、蘇瓊飾小英、王夢雲飾少年皮匠）

屏風後（欧陽予倩作、欧陽予倩、唐槐秋、呉家瑾、厳工上、方杭僧、徐志尹、国語上演）

二日（金）は、職員、学生親族、芸術界、三日（土）は、新聞界、四日（日）は、党部、軍政界を招待。四日の公演には、陳主席及び夫人を始めとする軍政界の要人多数が観劇し、研究所音楽団による演奏がついた。以後、日曜ごとに「戯劇」週刊を発行、胡春冰主編、第十九期より『広』副刊となり、第一一一期で停刊。付設音楽会は、水、土曜に演奏会を開くという。

九月十三～十五日　研究所小劇場において、第二回話劇公演（午後八～十一時）。

男人（小山内薫作、田漢訳、盧敦飾王三吉、李月卿飾阿素）
賊（前田河広一郎「盗人」、欧陽予倩訳、呉回飾賊、王夢雲飾紳士、高偉蘭飾博士夫人）
最後的擁抱（サルドゥー「トスカ」、欧陽予倩訳、章鎮藩飾警察総監、盧敦飾画師、蘇紹英飾杜若芬）

十三日は、招待客のみ、十四、十五日は公開公演。チケット一枚四角。第二回公演特刊を発行。[3]

九月二一日　音楽演奏会。パリ音楽学院より一時帰国した馬思聡によるヴァイオリン演奏。[4]

九月二八日　戯劇研究所付設演劇学校再開、学生募集。話劇班十五名、歌劇班十五名、音楽班十名、男女不問。一年半にて卒業。十月八日、入学試験。

十一月十九日　「反俄宣伝週」の要請により、省教育会大礼堂にて話劇公演。演目は、「黒龍江之鬼」、「小英姑娘」、「傷兵之妻」。

十一月　粤劇の名優羅品超、この頃、演劇学校より八和戯劇養成所に移る。演劇学校では、話劇「小英姑娘」、「車夫之家」の主役を演じたという。[5] ただし、入学試験の合格者に、本名羅肇鑑の名前は見えない。羅品超に演劇学校への入学を勧めたのは、彼の粤劇の教師であった花鼓江であるが、花鼓江は演劇学校の粤劇の教師もしていたので、その推薦で入学したのかも知れない。

十二月四日　第三回話劇公演広告。

十二月六～八日午後七時開演。

可憐的裴迦（曹靖華訳、両幕喜劇）

再見（独幕劇）
同胞姉妹（顧仲彝作、独幕喜劇）
撫兒難（山本有三「嬰児殺し」、独幕悲劇）
屏風後（独幕喜劇）

十二月六日　広州市内に戒厳令が敷かれ、午後十時以降の交通、上演が禁止されたため、第三回話劇公演延期の広告。

十二月　欧陽予倩、馬思聡と相談し、管絃楽隊の設立を計画、省政府に認可される。[ネ]

一九三〇年

三月頃　楽隊設立のため、フィリピン人とロシア人を招聘するもうまくゆかず、最終的には、十九名の中国人楽隊員を確保。[ネ] 歌劇の教授の招聘と楽器購入のため所員をフィリピンに派遣したというのは、この間の事であろう。[ツ]

四月十六日　上海『時事新報』に、「広東戯劇研究所付設演劇学校特別班」の学生募集の広告。国語の会話能力が条件につけられる。

四月二四～二八日　第五回話劇公演（第一次）。[ネ]
茶花女（高偉蘭飾馬格哩脱、粤語上演）
公演特刊を発行。[4]

五月十一～十三日　第五回話劇公演（第二次）。[ネ]
茶花女（粤語上演）

六月二二～二三日　党部大礼堂において、広東省市党部招待による沙基惨案記念公演。[5]

怒吼罷中国！

のち、警察同楽会で二回（七月四、五日）、黄埔軍官学校で一回公演。[4]

夏季　管絃楽隊成立。馬思聡再びフランスに戻る。代わって陳洪氏が楽隊長を担任。[4]

秋季　音楽学校が設立され、演劇学校に戯劇文学系も増設される。広東戯劇研究所の学校組織が整う。[6] 毎月の経常費が六千元に増額される。[4]

十二月十七日　研究所小劇場において「有家室的人」を試演。[7]

十二月十九～二一日　研究所小劇場において話劇公演。

有家室的人（導演：欧陽予倩、章正凡飾皮有徳、彭国華飾麗荘、高偉蘭飾維貞、馬慧卿飾慕貞ほか十六名）

観客は、学生、教授が大部分、職員、商人、労働者などを含め総計千五百人。[7]

一九三〇年初め　馬彦祥、欧陽予倩の招きに応じて、演劇学校で教鞭を執りながら『戯劇』の編集にあたるが、売ゆきが悪く、また言葉も通じず、ほどなくして上海に帰る。[4]

一九三一年

一月　六日　広東戯劇研究所、広東省教育会が戯劇音楽演奏大会を共催、教育会大礼堂において「有家室的人」を公演。観客一千人、全省各県党部代表及び職員を招く。[7]

一月三一日　青年会大礼堂において「有家室的人」を公演。観客千五百人。[7]

二月（？）　研究所小劇場において、第十回話劇公演。[7]

茶花女

三月二七～二九日　研究所小劇場において、第十一回話劇公演。(ウ)

忘了的礼帽（ダンセニイ卿作、余上沅訳、独幕劇、導演：唐槐秋、李晨風飾客人、趙如琳飾詩人、潘震球飾小工ほか二名）

幻滅（Pigmalion）（欧陽予倩訳、独幕劇、導演：欧陽予倩、盧敦飾皮格馬林、萬瑞芳飾像、李月卿飾蒂羅ほか二名）

無名戦士（ダンセニイ卿作、馬彦祥訳、二幕劇、国語上演、導演：胡春冰、章正凡飾亜傑門王、陳惠民飾勢柴、李晨風飾老奴ほか二二名）

「幻滅」と「無名戦士」の上演には、管弦楽隊隊長陳洪氏の作曲した音楽が配され効果をあげ、舞台装置は、邵知帰による構成派の立体的な背景が製作される。

四月三～五日　研究所小劇場において、第十二回話劇公演。(エ)

白姑娘（欧陽予倩作、国語上演、徐志尹飾于寄、唐槐秋飾王百歳、欧陽予倩飾劉得勝ほか四名）

国粋（欧陽予倩作、粤語上演、李晨風飾老爺、張錦裳飾太太、李月卿飾貧家妻、盧敦飾貧家夫ほか十三名）

買売（欧陽予倩作、国語上演、鍾啓南飾梅希愈、唐槐秋飾陶近朱、唐叔明飾梅可卿ほか八名）

六月　戯劇学校演劇系の学生が、卒業試験ののち第一劇団を結成、十二日間に及ぶ公演を終えたあと、各地に巡演に出るという。公演の日程は以下の通り。(オ)ただし、実際の公演状況は不明。

六月三日　月亮上昇、怒吼罷中国！
四日　未完成的詩、幻滅、忘了的礼帽、未完成的傑作
五日　有家室的人
六日　史推拉、千方百計
七日　屏風後、国粋、買売、走馬灯
八日　可憐的裴迦、同胞姉妹、自由的范西
九日　茶花女
十日　一対小説家、賊、父帰、白茶
十一日　一百二十五両銀子的面孔
十二日　国粋、屏風後、買売、走馬灯
十三日　茶花女
十四日　有家室的人

七月十五日　演劇学校歌劇班の学生が、粤劇『楊貴妃』（欧陽予倩編劇・監督、易剣泉・蘇蔭階改譜）を広州で最も格式の高い海珠大舞台で上演。[ケ、コ] 広東の粤劇の観客に受け入れられず、大きな経済的損失を被る。[カ] 粤劇の上演はこの一度だけに終わる。上演後、『荊軻』の舞台練習も計画されるが、果たさず。[ク]

八月　経常費がストップし、実質上、研究所閉鎖となる。欧陽予倩は、私立広東芸術院を作り、規模を縮小して演劇学校を継続する。[ク]

十月　　省政府に建物を接収される。欧陽予倩は、一切の活動を打ち切り上海に戻る。[7]

以上、広東戯劇研究所の活動を追ってきたが、まず、欧陽予倩が最も力を注いだと思われる演劇学校の教育方針等について、検討しておきたい。注6の組織図にも示されているように、演劇学校の演劇系には、歌劇班と話劇班が設けられ、この二班が、演劇学校の基礎になっていた。一九三〇年十月から実行された歌劇班の授業時間割表を、[オ]かつて欧陽予倩が運営した南通伶工学社のものと比べて見ると、明らかに後者での経験が生かされていることがわかる。それは、歌劇（粤劇）の基礎を教え込む時間を十分に取り、その他の授業を最小限に押さえたことである。歌劇及び歌劇の上演に関係する舞踏、唱歌、武術、音楽の授業が、一週四十八時間のうち男子学生で四十時間、女子学生で三十九時間を占めており、歌劇、歌劇実習の授業は、毎日二～四時間組まれている。その他の授業では、国語に四時間割かれているのが目につく程度である。歌劇のうたで舞台に立てるようになるには、少なくとも二年が必要で、[オ]当然、基礎訓練の時間も長時間必要とされたためである。話劇班の授業では、これも一九三〇年十月から実行された時間割表を[オ]見ると、話劇実習と歌劇実習が半ばを占め、残りの時間は、戯劇文学系との共通授業が多く組まれている。話劇俳優の養成に、歌劇実習を課している点にも注目したい。また、話劇班と戯劇文学系の授業においても、国語が三、四時間組まれ、演劇学校全体の教育方針として、国語の習得が重視されていたことがわかる。[オ]こうしたカリキュラム編成と十数回に及ぶ公演活動の結果、演劇学校からは、のち広州や香港の粤劇、話劇、映画界で活躍することになる多くの人材が巣立っていったのである。[7]

欧陽予倩は、演劇学校の外に、音楽学校と管絃楽隊の設置にも努力したが、これも伶工学社以来の考えの反映であった。即ち、伝統劇を改革して新歌劇を誕生させるには、新しい劇音楽の創造が不可欠であり、そのために

は、これまでの中国音楽に対する全面的な再検討を行い、各地の民間音楽の収集、楽器・楽譜の改造から中国独自の和声法の確立までを射程に収めねばならない。[7] 欧陽予倩の思い描く伝統劇改革の青写真通りに、これら一連の作業を遂行するには、是非とも音楽学校と管絃楽隊は必要だったのである。

次に、広東戯劇研究所が当時の広州演劇界に果たした役割について、簡単に考察しておきたい。まず、話劇について。広州に話劇を定着させる上で最も力のあったのが、演劇学校の十数回に及ぶ話劇公演であったことは、言を待たない。最初は、招待券を配ってもあまり入らなかった客が、チケットを売り出してからは、徐々に増えだし、満員になることも少なくなかったという。チケットが安価（一枚四角）であったことも、普及に大いに役立った。[8] 一九三〇年六月二三日の「怒吼罷中国！」の公演では、ゲタをはいた子供連れの労働者が続々と入場してきて、そのゲタの音でセリフも聞き取りづらいほどで、舞台上で叫び声があがると、客席からも怒涛のような声があがり、泣きだす人まで出る盛り上がりようであったという。[9] 研究所のこうした公演活動は、更に広州の学校劇の隆盛にも大きな役割をはたした。それは、あたかも「演劇の年」と言われた一九二九年、上海の摩登社が展開した学校劇運動に呼応するかの如き動きでもあった。摩登社は、一九二九年秋、南国社から分かれて誕生した劇団で、民衆演劇運動を進める第一歩として、学校劇運動を展開、大夏、光華、復旦、交通四大学での巡演を行った。[9] その中心人物の一人が、南国社の広州公演に参加し、そのまま広州に留まって芸術話劇運動を起こした左明である。

広州では、一九三〇年一月、省教育会主催の中学校以上の学校劇団が参加する独幕劇コンクールが開かれ（『広』一九二九年十二月三一日）、以後毎年開かれるようになる。もともと演劇活動の盛んな嶺南大学でも、三〇年五月に中等部の演劇コンクールが行われ、[10] 六月には協和女子師範で、国語による演劇コンクールが開かれている。[11] 広州

の学校劇は、演劇学校の話劇公演が軌道に乗り出す一九三〇年頃から、にわかに活発な動きを見せはじめるのである。こうした気運に促されるようにして、三一年二月には、広州学校劇団聯席会議が開かれ、学校劇運動の組織化が行われた。[12] 欧陽予倩をはじめとする研究所の人たちは、学校劇のコンクールや会議には必ず招かれており、学校劇で上演される演目にも、演劇学校の演目がしばしば用いられている。当然ながら、研究所の指導力が期待されていたであろうことは想像に難くない。

研究所が閉鎖されてからも、演劇学校の卒業生や研究所関係の演劇人によって、広州の学校劇運動、ひいては広州の演劇運動が支えられた。演劇学校の卒業生陳酉名は、欽州で教員をしながら、青鳥劇団を組織し、欽州の学校劇を指導し、[13] 同じく卒業生盧敦は、李晨風、李月卿、高偉蘭等と近代演員団を組織して、広州で演劇活動を続けていた。[カ]

中山大学教育系の学生であった趙如琳は、在学当時から研究所の機関誌『戯劇』に演劇論文や台本の翻訳を多数発表していたが、卒業後一時『戯劇』の編集に携わったのち、私立遠東中学の英語の教員となり、学校劇を指導した。上演演目には、やはり演劇学校の演目（「可憐的裴迦」、「屏風後」、「有家室的人」等）が多く選ばれ、上演には、演劇学校の卒業生（盧敦、区愛など）も加わり盛り上げた。三三年には、学校劇団の独幕劇コンクールで、白薇の抗戦話劇「敵同志」（『現代』二巻一期、一九三三年十一月）を監督して第一位に選ばれている。抗戦後は、広東の戦時省都であった韶関で省立芸術専科学校の校長を務め、四四年に桂林で開かれた西南第一届戯劇展覧会にも参加している。[14]

また、研究所編纂股の主任であり、演劇学校運営の中心人物でもあった胡春冰が、演劇学校の戯劇文学系の卒業生と組織した「広州前衛戯劇作者同盟」は、一九三二年夏、他の組織と合同して「広州文化界大同盟」に発展

し、三三年四月には、中国左翼文化総同盟（中国左翼戯劇家聯盟はその下部組織）の広州分盟となって、広州の左翼演劇活動を指導した。[15]

もう一つ、研究所が一般の話劇公演に提起した大きな問題がある。それは、セリフの処理、即ち方言使用の問題である。演劇学校は国語教育に力を注いでいたとは言え、民間に国語が殆ど普及していない広州で、あえて国語による上演を行うことは、最初から一般の観客を劇場外に締め出すに等しかった。しかし、方言を用いた白話劇と言えば、当時は、ごく一部の例外を除いて、娯楽中心の低俗な芝居（所謂「文明戯」）を意味するのが実情であった。そうした状況下にあって、生々しすぎる方言使用により、話劇に必要な社会に対する批評的態度を維持し、人物の性格、時代の精神を演じ得るか否かは、演劇の先進地である上海でも、未だ試されてはいなかった。[16]

話劇公演における方言の問題を、最初に提起したのは、明悔「随便談（二十三）戯劇上的方言問題」[17]であろう。明悔氏は、方言を使用する文明戯から一線を画するため、話劇（原文は新劇）は一律に国語を用いるべしといういささか形式的にすぎる主張に異を唱えた。彼は、上演する地方によってセリフの「標準語」を変えるべきだというのである。江南一帯では蘇州語、中国北方では北京語、福建、広東では省城の方言を「標準語」にし、また上演先の方言であれば自由にそれを用いることはかまわないと主張する。ただ、彼が方言使用の根拠としたのは、俳優の国語の程度が低く、セリフの美が損なわれるくらいなら、方言のほうがましだ、という程の認識であり、方言独自の舞台効果には言及していない。

次に、話劇の方言使用に触れたのは、田漢である。田漢は、上海における南国社第一次公演後、セリフに必ずしも国語を用いる必要はなく、話劇を全て上海語で上演してみたいと述懐している。[18] ただし、実際に上海語を用いた公演は実現しなかったようで、彼もまた、方言の舞台効果を体験するには至らなかった。

彼らのあとを受け、話劇の方言使用を実際に実現したのが欧陽予倩であった。彼は、広州という地での話劇公演を成功させるため、広東語での上演効果を試さざるを得ない立場にあった。そのため、実際に国語と広東語による上演効果を比較した上で、方言使用の問題を考えることができた。彼は、国語と広東語による話劇公演を見た地元広州の学生や教授たちに意見を徴し、自身の体験も重ね合わせた上で、広東語での公演によっても、国語に匹敵する上演効果をあげることは可能であると考えた。一部の学生には、国語の方が、広東語よりも音が高く、しかも強いので、舞台効果が良く、感情を動かしやすいという意見もあったが、欧陽予倩は、言葉の音のバランスさえ調整すれば、広東語のこうした弱点を克服することは可能だと結論した。[19]

しかし、広東語での上演に懐疑的な人もいた。地元の健庵氏は、広東語には標準となる方言がなく、多様性が激しすぎ、舞台の用語には適さないのではないかと考えた。例えば、「回来了」という一語が、広東語では十二通り以上あり、どれがセリフに適切な一語であるかを決定するのは、並大抵のことではないと言うのである。[20] こうした問題が生まれるのは、話劇の台本が国語（或いはそれに近い言葉）で書かれており、方言使用に際しては、翻訳という作業が必要となることにある。確かに、欧陽予倩も俳優による勝手な広東語への翻訳を切に戒めており、本来ならば、広東語の書記方法を確立し、広東語による創作を試みることで、根本的な解決がはかられるべきであった。しかし、研究所では、そこまで踏み込んだ努力は行われなかったようである。演劇学校の方言使用は、その都度、監督や編劇者が国語から広東語に翻訳していたものと思われる。のちの演劇学校での話劇公演では、例えば「屏風後」や「買売」のような上流階級を演じる場合には国語、「車夫之家」や「国粋」のような下層階級を演じる場合には広東語という使い分けが行われている。また、国語による上演は、多くの場合、演劇学校の教職員によって行われていた。いずれにしろ、演劇学校における話劇の方言公演は、方言使用イコール文明戯（娯

楽中心の白話劇）といった見方を一新し、国語の普及していない地方における方言公演に大きなより所を与えることとなった。

その後、欧陽予倩は、一九三四年に香港で『油漆未乾』の広東語公演を成功させている。[21] 上述した趙如琳は、一九四四年の西南第一届戯劇展覧会において、広東語による『油漆未乾』を上演し、話劇の方言使用に関する議論を巻き起こした。[22] 広東語以外では、学校劇運動の火付け役となった摩登社の陳明中が、成都で分社を組織し、四川方言による話劇を公演したことが記録に残されている。[23]

次に粤劇について。残念ながら、研究所の粤劇改革がどの程度進んでいたかを示す資料は、僅かしか残されていない。研究所の機関誌『戯劇』に五編の粤劇改革に関する論文が掲載されたこと、欧陽予倩が三本の新歌劇を発表したこと（うち一本は南京での作）、失敗に終わった粤劇公演が一度あること、これが全てである。失敗に終わったとは言え、粤劇改革の実際を知る上で、極めて重要だと思われる『楊貴妃』公演についても、今のところ、それが国語で粤劇のうたをうたうという大胆なものであったという記述[7]しか見出せていない。

欧陽予倩は、広州の粤劇が、商業化の影響を甚だしく受けていることを憂い、上海の二の舞にならぬよう忠告する一方、名優馬師曽の地声での歌唱、低俗な言葉の使用、龍舟・南音など説唱芸能の音楽の吸収といった新しい試みには、熱い支持を表明していた。[24] 粤劇界とも密接な関係を結んでいた彼のこうした言論が、当時の粤劇界の趨勢にいかほどの影響力を持ち得ていたのかは、今後の更なる資料の発掘に待ちたい。

時代はやや降るが、欧陽予倩の広州での活動に対する田漢の見解を紹介しておこう。田漢は、一九四六年の段階で、欧陽予倩の伝統劇の改革を振り返り、彼が二十年前に書いた『潘金蓮』を高く評価した後、「残念なことに、予倩先生はこの運動を堅持し続けることができませんでした」と述べる。[25] つまり、田漢の目には、研究所で

の彼の活動は、『潘金蓮』の後を更に発展させる程の成果をあげ得ていないと映っていたのである。広東戯劇研究所は、国民党の党化政策の一環として機能することをその最初から求められていた。故に、党化演劇を上演もし、粤劇改革においては、審査と検閲を用い、三民主義をその基準とせよという議論も機関誌『戯劇』に掲載された。こうした方面にも精力を割きながら、粤劇改革という難事業に取り組むには、成立から閉鎖までの二年半の時間は、やはりあまりに短すぎたと言うべきであろう。

しかしながら、広東戯劇研究所は、その短い期間のうちに、粤劇、話劇、映画界に優れた俳優、監督を多数送り出し、演劇の教育機関としての役割は、十分に果たしたと言える。そして広州における話劇公演を定着させ、指導したこと、話劇における方言使用を成功させたことなど、話劇史上において評価すべき成果をあげたことも記憶せねばならないだろう。

〔注〕

(1) 以下の資料からの引用は、略号によって本文中に記す。

オ 「広東戯劇研究所之現在与将来」（『戯劇』二巻三・四期、一九三一年二月）

ワ 陳酉名「広東戯劇研究所的前前後後」（『広東話劇運動史料集』第一集）

カ 盧敦「広東戯劇研究所成立前後的戯劇活動」（『広東話劇運動史料集』第二集）

ヨ 招鴻「粤劇導演芸術家陳酉名」（『広州文史資料第四二輯　粤劇春秋』広東人民出版社一九九〇年十二月）

タ 史君良編著『聶耳伝略』（香港上海書局一九八二年七月）

レ　唐槐秋「通信」（『南国週刊』第八期、一九二九年十月）
ソ　劉伶玉『羅品超奇伝』（香港周刊出版社一九九〇年四月）
ツ　「戯劇消息」（『戯劇与文芸』一巻十・十一期、一九三〇年三月）
ネ　唐槐秋「演過了茶花女」（『戯劇』二巻一期、一九三〇年六月）
ナ　欧陽予倩「怒吼罷中国上演記」（『戯劇』二巻二期、一九三〇年十月）
ラ　胡春冰「有家室的人上演記」（『戯劇』二巻五期、一九三一年四月）
※欧陽予倩の佚文「導演過有家室的人以後」及び「有家室的人上演瑣記」を含む。
ム　美英、英華、季濱「劇壇奮闘六十春――馬彦祥伝略」（『中国話劇芸術家伝第五輯』文化芸術出版社一九八七年一一月）
ウ　胡春冰「無名戦士上演記」（『戯劇』二巻六期、一九三一年六月）
ヒ　胡春冰「表現了国粋、做完了買売以後」（『戯劇』二巻六期、一九三一年六月）
ノ　「広東戯劇研究所将挙行大規模的公演」（『戯劇』二巻六期、一九三一年六月）

(2)　研究所付設の小劇場は、新たに設けられたものではない。実際は、教育庁の審査によって、大劇場ばかりか小劇場の建設も不可能になり、稽古場の後ろ（原文：練功大庁後座）に小型の舞台を設置しただけの簡便なもので、五百名程度の観客がはいったという。(オ、ワ)

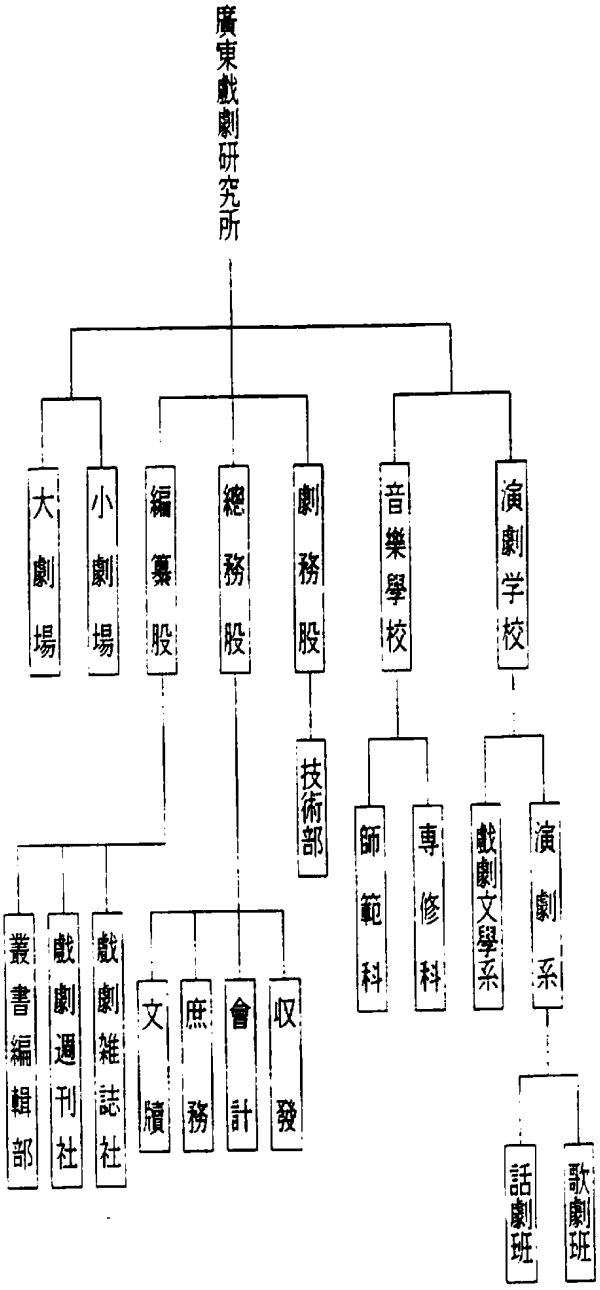
(3)　第二回公演の劇評には、剣「論戯劇研究所第二次公演的話劇（一～四）」（『広』一九二九年九月二四～二七日）があり、記念写真が『戯劇』一巻五期に掲載されている。

(4)　第五回公演の劇評には、小梅「看了茶花女以後」（『新民報』五月四日、未見）、寒山「看過茶花女公演而

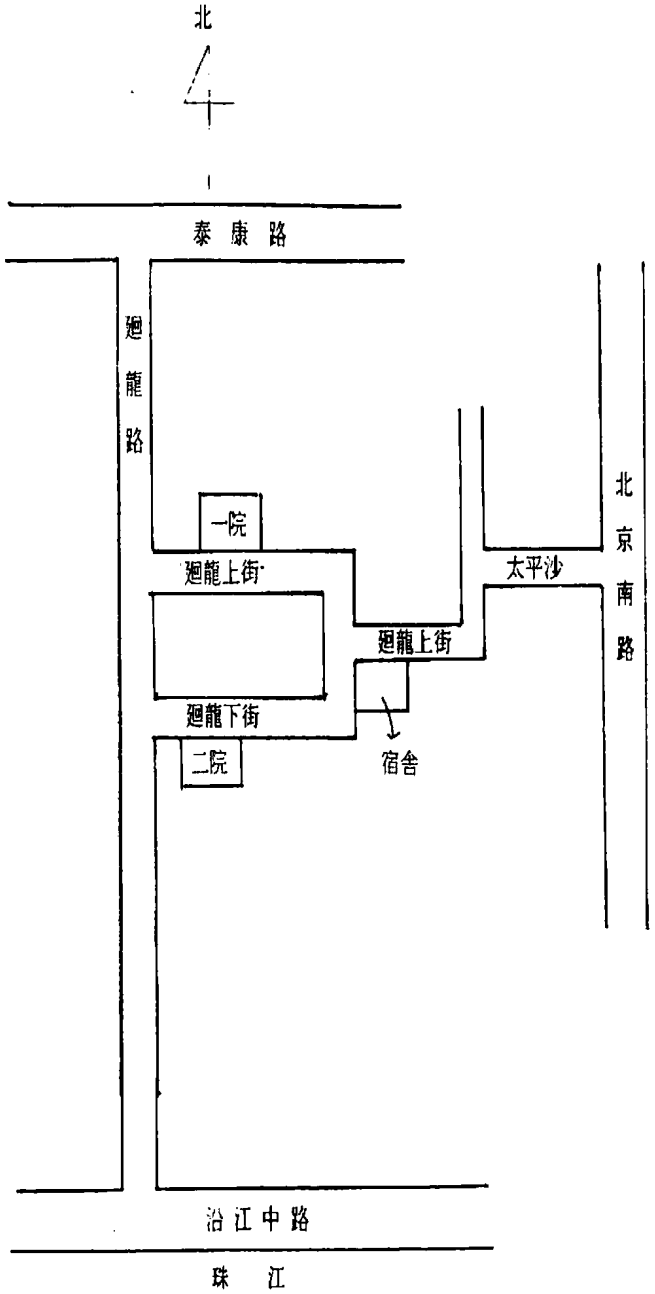
談到戯劇的種種」（『広』五月三一日）、陳紹哲「茶花女ー我們対它的批評」（『広』「晨鐘」）などがある。[注]

（5）「怒吼罷、中国！」の上演に関しては、上海『民国日報』「戯劇週刊」第五三期に、「『怒吼罷、中国！』首次出演於中国」、胡春冰「『怒吼罷、中国！』的本事」（一九三〇年七月二三日）、同第五四期に、欧陽予倩「演『怒吼罷中国』談到民衆劇」（七月三〇日）が掲載されている（後二者は『戯劇』二巻二期所収）。その他には、胡春冰「由『怒吼罷、中国！』談到『天下大事』」、何子恒「『怒吼罷、中国！』」（いずれも『戯劇』二巻二期所収）がある。

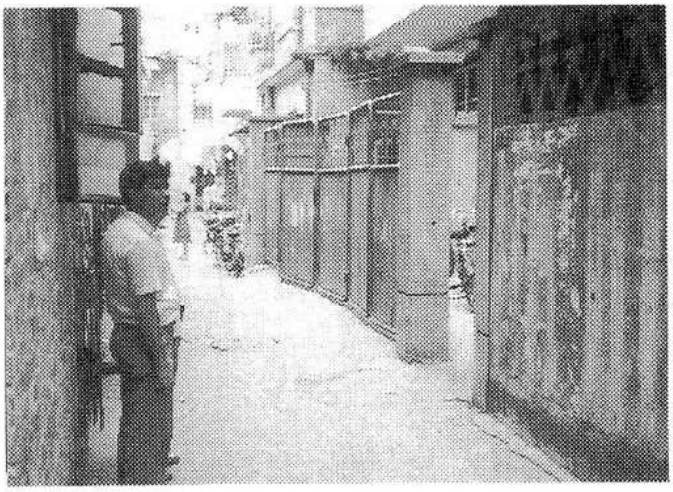
（6）参考までに研究所全体の組織図を示しておく[注]（但し大劇場は計画のみ）。



広東戯劇研究所は、成立からすでに半世紀以上の歳月が経ち、今日では、その旧址も不分明になっている。一九九〇年八月、筆者は広州を訪ね、演劇学校の学生であった陳酉名氏の案内により、研究所・演劇学校(一院)、音楽学校(二院)及び学生宿舎の所在地を確かめ得た。同行された広東省芸術研究所の黄鏡明氏も初めてその所在地を確認できたと感慨深げであった。黄鏡明氏には、速やかに調査結果を公表するよう依頼されていたが、遅延を重ね今日に至った。以下に、その地図と写真を掲げておく。なお、学生宿舎の建物は、陳酉名氏によれば、当時の姿そのままだということである。一九九〇年当時には、広州市越秀区成人教育学校と広州市広播電視大学越秀区工作站の看板が掛かっていた。



一院旧址（廻龍上街 12 号）
（右より黄鏡明氏、陳酉名氏、筆者）



二院旧址（廻龍下街 9 号）
（左は黄鏡明氏）

宿舎（廻龍上街 9 号）
（右より陳酉名氏、黄鏡明氏）

(7) 欧陽予倩「戯劇改革之理論与実際」(『戯劇』一巻一期、一九二九年五月)

(8) 張方衛「三十年代広州粤劇盛衰記」(『広州文史資料第四二輯　粤劇春秋』広東人民出版社一九九〇年)によれば、三十年代初期の広州では、映画のチケットが最高の劇場で一元二角、以下一元、八角、七角、六角と続き、最も安価な劇場で二角から四角、粤劇は、省港班唐天宝班が楽善戯院で上演した時のチケットが三元で、これが粤劇の平均的な水準であったという。こうした数字から考えれば、演劇学校のチケットは、確かに当時の娯楽の中でも低料金であったことがわかる。

(9) 摩登社の学校劇運動については、姜敬輿「論学校戯劇運動」(「戯劇週刊」第四期、『民国日報』一九二九年六月十二日)、姜敬輿「学校劇運動的前路」(「戯劇週刊」第二二期、『民国日報』一九二九年十月二三日)、姜敬輿「学校劇運動的前路(続)」(「戯劇週刊」第二三期、『民国日報』一九二九年十月三十日)、姜敬輿「我們這次公演的意義」、許徳佑「摩登戯劇運動」、閻折梧「談学校劇運動」(「戯劇週刊」第二九期、『民国日報』一九二九年一二月一八日)及び魯思「関於摩登社」(『新文学史料』第四輯、一九七九年八月)、趙銘彝「関於摩登社的補充和説明」(『新文学史料』一九八〇年第二期)、辛島驍「『摩登社』の活動と『摩登月刊』」(『中国現代文学の研究』汲古書院一九八三年十月、第三章第三節第五項)などがある。尚、話劇が知識人の演劇であった関係上、話劇史は最初期から学校劇によって支えられてきた一面を有するが、とりわけ摩登社の運動以降学校劇が普及し、学校劇に台本を提供する顧仲彝編『劉三爺(学校劇本第一集)』(開明書店一九三一年五月)、白墟編『中学生戯劇』(中学生書局一九三一年九月)などが編まれ、学校劇上演の手引書である閻哲吾編『学校戯劇概論』(中央書店一九三一年六月)、周錦涛編著『学校劇導演法』(児童書局一九三一年十一月)、閻哲吾『学校劇』(商務印書館一九三六年九月)などが出版される。欧米の

学校劇の歴史を述べた范寿康『学校劇』（商務印書館一九二三年二月）も早くに出版されている。

(10) 欧陽予倩「嶺大最近之戯劇比賽」（原載『広』「戯劇」第四二期、一九三〇年五月〔未見〕、『欧陽予倩全集』第四巻　上海文芸出版社一九九〇年九月所収）

(11) 欧陽予倩「広州今日之学校劇」（原載『広』「戯劇」第四四期、一九三〇年六月〔未見〕、『欧陽予倩全集』第四巻　上海文芸出版社一九九〇年九月所収）

(12) 欧陽予倩「在広州学校劇団聯席会議上的開会詞」（原載『広』「戯劇」第七八期、一九三一年二月〔未見〕、『欧陽予倩全集』第四巻　上海文芸出版社一九九〇年九月所収）

(13) 紫陽、林池、小石「広東南路話劇運動発展概況」（『中国話劇運動五十年史料集（第三輯）』中国戯劇出版社一九八五年十二月、所収）、陳酉名、頼天籟、李体団「欽州『青鳥劇団』活動的始末」（『広東話劇運動史料集』第二集）

(14) 唐堯越「広東省芸術専科学校戯劇科」（『広東話劇運動史料集』第一集）、劉樹階「憶我的話劇啓蒙老師趙如琳」（『広東話劇運動史料集』第二集）、曾煒「広東戦時話劇的一顆星――記趙如琳」（『広東話劇運動史料集』第二集）

(15) 袁文珠「有関『広州文総』和『広州劇聯』的一些情況」（『新文学史料』一九八〇年第四期、のち『中国左翼戯劇家聯盟史料集』中国戯劇出版社一九九一年九月所収）

(16) 欧陽予倩「戯劇改革之理論与実際」（『戯劇』一巻一期、一九二九年五月）

(17) 『戯劇』一巻六期（一九二一年十月）

(18) 「初期運動的南国（三）第一次公演之後」（『南国的戯劇』一九二九年七月）

(19) 欧陽予倩「用粤語演話劇（一）」（『戯劇』一巻一期、一九二九年五月）
(20) 健庵「用粤語演話劇（二）」（『戯劇』一巻一期、一九二九年五月）
(21) 盧敦「回憶《油漆未乾》的首次演出」（『広東話劇運動史料集』第二集）
(22) 白伽「話劇採用方言？」、向培良「関於方言劇」、康平陵「戯劇的地方語演出和翻訳問題」及び「油漆未乾」に関する六本の劇評においても方言使用の問題が議論されている（『西南劇展』（上、下）漓江出版社一九八四年二月、所収）。
(23) 趙銘彝「関於摩登社的補充和説明」（『新文学史料』一九八〇年第二期）
(24) 頼伯彊、黄鏡明『粤劇史』（中国戯劇出版社一九八八年七月）第三二八－三二九頁。
(25) 田漢「劇芸大衆化的道路－覆李健吾先生」（『周報』第三八期、一九四六年五月二五日）

【付記】『南国週刊』第八期の閲覧に際しては、芦田肇氏（国学院大）のお世話になりました。記して御礼申し上げます。